

信州大学附属図書館
No. 68

主な記事

母学50周年記念の構想	1
桑樹の上田式仕立法試験	3
桑葺と桑林	4
蚕糸・繊維化学の最近の研究	6
サロンの近況	7
会員の近況	8
母校だより	10

千曲會報

1957年7月1日

昭和32年7月1日発行
長野県上田市常入
信州大学繊維学部内
編集兼発行人 小山長雄
信州大学繊維学部内
発行所 社団法人千曲会

昭和31年6月18日第3種郵便物認可 毎月1日発行 定価1部15円



初夏の高原 (神津牧場にて 清道氏提供)

母学50周年記念事業についての構想の一端

蒲生俊興

1. 時期の問題

わが信州大学繊維学部の前身たる上田蚕糸専門学校がわが蚕糸業界における最初の直轄専門学校としての創設が公布されたのは、明治43年3月26日(1910年)であり、しかも本校設置の地点を上田町に決定したのは同年8月25日であつた。その10日程前(8月13日)に初代校長針塚長太郎先生が文部視学官から任命されたのである。

かくして秋日地鎮祭と共に起工せられ翌明治44年4月17日(1911年)開校して始業式が行われ、養蚕科及び製糸科の第

1期生が入学を許可されたのである。

上記のような母校の沿革を辿れば、母校旧本館の建築当時(1910年)より数えて、1960年(昭和35年)の秋季で満50周年の星霜を閲することになるわけである。いま従来母校で挙行されて来た記念式典の年次を参考までに示せば次の通りである。

母校設置	明治43年(1910)	秋	期
開校記念式	大正2年(1913)	10.15	日
10周年式	大正9年(1920)	10.27	
15周年式	大正14年(1925)	11.21	

25周年式	昭和10年(1935)	10.21
30周年式	昭和15年(1940)	10.26

これによつて50周年式は昭和35年(1960年)秋日が妥当かと考えられる。

2. 既往50年間における母校の功績

明治44年4月に呱呱の声をあげた上田蚕糸専門学校も、昭和19年に上田繊維専門学校と改称せられ、更に学制改革と共に昭和25年から新制大学に昇格せられ、信州大学繊維学部として再出発をしたわけであるが、現在まで46年間に重ねた卒業回数と卒業生数を見ると実に総数4,128名に達している。

科 別	卒業回数		現在 卒業生数
	専門 回	大学 回	
養 蚕	38	5	1,123
製 糸	38	5	1,078
紡 織	30	5	677
繊維化学	9	5	474
繊維農業	5	0	224
別 科(含教婦科)			503
専 修 科			49
合 計			4,128

もつともこの外に不幸にして不帰の客となられた物故同窓生が622名ぐらゐるから、この期間に母校から送出された卒業生の総数は4750余名に達するわけである。これに昭和35年までの3年間毎年150名宛の卒業生を出すことになるから50周年式当時の卒業生総数は4,578名という莫大な人員に達することになる。

この半世紀間に母校がかくも多数の繊維科学に関する技術者、教育者、学者等を送出した功績は今さら喋々を要しない。即ち50年間においてわが国の蚕糸業から総ての繊維業界のために尽した母校の偉功はかくも多数の卒業生諸氏の活躍振りによつて証明せられるところである。尙この期間における本校教官の研究業績等による学界並に業界への貢献は極めて多く到底枚挙に遑がない位である。

3. 記念事業の問題

明治43年以来明治、大正、昭和の3代に亘り半世紀間に繊維業界のために尽した母学の功績がかくも偉大なるものがあるだけに私共はこの有意義なる50周年を記念し、わが繊維科学の進歩発展のために永遠に働きうるような極めて能動的な記念事業を遺したいものと念願している次第である。

これまで記念事業として発言されたものや私が思付いた事項をまとめて見ると次の各種が思い浮ぶのである。

(1) モニュメントの建設

母校の偉大なる功績を記念し、アメリカの大学などにみられるカンパニール(Campanile)(通訳は見当らないが、日本の塔のようなもの)のように、これがワシントンの記念塔や巴里のエッフェル塔のように市内の何処からも眺められ、その大学の標識となるものである。これは極めて不生産的であり我国のような貧しい国柄では到底出来ない相談である。

(2) 記念資金を設定する

母校50周年を記念して集めた資金をもつて、育英資金、研究奨励費、海外留学資金などの財源に当てる。この計画は極めて有意義ではあるが、献金者が自ら制約せられ、従つてこれのみでは困難となると思う。

(3) 繊維科学研究所の設立

これは先に述べたように極めて能動的な計画の一つとして私共は大賛意を表したいが、仮にこの研究所が何千万円かで建てたとしても今後の運営に対しては年々莫大な経費を要しやがて大学の附置研究所として認定されるまでは著しい働きも出来ない惧れがある。

(4) 繊維科学図書館の建設

本学部には現在3万数千冊の圖書を蔵する信州大学図書分館はあるが、今後は凡そ繊維科学の研究に必要な内外の諸文献のセンターとして、近年学術会議や文部省などで計画中の学術情報局のうち、特に繊維科学の研究に必要な文献は出来るだけ集めて、この方面の科学技術者の応急の利用に便するようにする。又その附帯事業として抄録雑誌繊維学連報のようなものを発刊する。

この構想には建築物には木造でも1千万円以上かかると思うが、その後の運営に経常費が年々2百万円以上計上されねばなるまいと思われる。

(5) 繊維科学研究博物館の建設

博物館という名から、古典的な物件のみを蒐集陳列する場所と直感されがちであるが、ここにいわんとする研究博物館というのはいわゆる欧米の Research museum であり、繊維科学に対する日進月歩の各研究成果を実物や図表などで研究分野毎に陳列してこれに精細なる説明を付けておく。

一度本館をつぶさに参観せらるれば、忽ちそれぞれの専門分野における研究の現状が理解せられ、一時に数百巻の最新刊行の圖書を讀破するに匹敵する科学技術に関する最新の知識を獲得することが出来るから、学生生徒の向学心と研究意を旺盛にし、又発明者や研究学徒に自ら貴重なヒントを与えることになる。

上の研究博物館は建築費は7・8百万円から1千万円位かかると思われるが、その内容の整備には本学部には仮に20講座の専門分野があるとして、各講座の教官が分担してこれに当るとすれば、陳列戸棚や標本代など各講座毎に10万円合計200万円も計上すれば立派なものが出ると思う。

その運営には文部省博物館法に従つて管理事務官が1名配置されることになり、上に記した文献センターなどを兼営し、抄録連報雑誌を刊行することにすれば独りわが学部内の職員学生の研究に便するのみならず、一度本館の利用価値を知った特志家や参観者に対し、いわゆる視覚教育による科学技術教育や社会教育に対する効果は素晴らしいものと考えられるのである。かくして、やがて本学部における研究博物館は独り本学部のみならず上田市、否本県下の名物となることであろう。

(6) 繊維会館の設立

上田市内に適地を選んで繊維会館を建築して上田市民一般の利用に供するという意見もあるが、これは主として同窓生のための醸金によつて建てる場合に可能性が多く、一般からの御寄附に依存することは困難かと思われるし、又その後の運営費を維持費のために相当な営利事業も計画せねばならないし、他方上田市としてモダンな市民会館を計画中だからこの案は比較的比重は軽いように考えられて来た。

(7) 繊維学部の研究施設や印刷機械等を拡充附設すること

この案も傾聴に値する案かと思われる。もとより50周年記念事業はその性質上、同窓生と母学の教職及び事務職員全員との協力により、学生の意見も徴して、この際日進月歩な繊維科学の教育と研究上如何なる面が欠けているかを十分に研究

調査した上で、例えばガンマフィールドのような高度の放射線応用研究室の建設とか、或はこの機会に母学に最新式の印刷機械を敷設し、本学、千曲会の印刷物から雑誌の刊行並に職員や一般市民の利用にも備えるというような名案もあると思われる。外国の大学などでは地下室などにすばらしい印刷機械を有し、独自で立派な印刷が行われている。従つて各教官の教材なども皆本式の活字体印刷として学生に配布されているのを見て誠に羨ましく思つた。

(8) 学生ホール及び会館の建設

教官の研究施設の充実は勿論望ましいが、学生の勉強と集會に便し、同時に学内における百貨の購買組合や食堂を経営し、時には音楽会や映画会を催すなどに便宜を与えることは学生の教養と思想善導並に職員学生の福利増進の上に重大な効果を齎らすことと思われる。

(9) 學術雑誌の復刊又は発行

母校50周年を記念し、絨維科学に関する學術雑誌(例えば絨維学雑誌)を発行する基金を作る。

この案も科学奨励の上から一応考慮せねばならぬ事業であるが、これは前記の諸案件と附帶的に是非実行したいものである。

(10) 南米養蚕移民事業

先般碓氷茂氏の視察の結果^{ブラジル}伯国、パラガイ国等における養蚕移民は極めて有望な国策であることがわかる。長野県においても既にパラガイ国に対する養蚕移民を奨励している立場でもあるから、この線に沿つて、千曲会が今後あらゆる角度からも、本会々員を1人も多く南米に送つて彼地に理想的な千曲村を建設する事業は確かに有意義な一大事業である。こ

れは必ずしも母校50周年を待つ迄もなく即刻千曲会として、とりかかつてよい事業に違いないが、ただ右の大事業に要する相当の経費を記念事業として募金し、南米の地に千曲会支部を強固に建設することは国策の上からも明かに有望な事業の一つであろう。

4. 結 び

以上は思いついたままに順序もなく書下して見たままであるが、先ず50周年の記念事業の計画に先立つて、その莫大な基金を如何に集めるかを考える必要がある。即ち 1. 同窓生のみを主体として集めるか 2. 一般実業界からも募集するかであるが、同窓生の寄与は本計画に対しては勿論本筋であるが、1千万円以上集めるためには少くとも1人平均3千円以上の醸出がなければ可能性はなからう。又一般から寄与を願うためには、記念事業の性格が、出来る限り大衆の利用し得るものか、又は学界、業界などに対して永遠に能動的な貢献をなし得るような施設でなければ賛成者は少いことであろう。

又記念事業の種別を研究するには独り同窓生のみでなく、母校の教職、事務職全員との協議により各層の委員を挙げてあらゆる角度からこれを研究し、遺憾なきを期すると共に、同窓生と母校職員との全面協力によつて麗わしい50周年事業が成就されるのである。

以上は私が平素抱懐している夢の一端を披瀝して、50周年計画の御参考に供したまでである。御判読を多謝する。

(1957. 5. 16)

桑樹の上田式仕立法試験

須 田 圭 二

緒 言

桑樹の上田式仕立法(二段刈仕立)は長野県下伊那郡松尾村喬木館養蚕部において穂坂小牧氏(蚕2)が始められ針塚長太郎氏により上田式と命名せられ川瀬惣次郎⁽¹⁾樋口琢磨氏⁽²⁾および遠藤保太郎氏⁽³⁾等によつて記載されたがこれらはいずれも穂坂氏の試験結果を基礎とした。

著者はかつて昭和18年7月号の千曲会報において“年3回収穫ししかも萎縮病を絶対に発生しない桑樹の仕立法”と題して試験の結果を記載して置いた



十文字根高刈 秋蚕用桑の摘葉後の状況
肖像は筆者



十文字根高刈 春蚕用刈桑伐採当時

が今回さらに試験を重ね多少改良を加えることもあるので改めて報告することとした。いずれその詳細は蚕糸化学須田論文集(来る9月頃謄写印刷の予定)に記す。

桑樹の上田式
仕立法試験

大正14年から昭和13年にかけて上田蚕糸専門学校において行つた成績試験の結果を総括して考察すれば次のごとくである。

- (1) 上田式仕立には中刈と高刈とを兼ねるもの(これを中高刈と命名する)と根刈と高刈とを兼ねるもの(これを根高刈と命名する)と

二通りあるが根高刈の方が成績が可良である。

- (2) 上田式仕立を行うべき桑樹の品種は枝の多い品種にして夏秋蚕兼用に適する品種を可とする。白桑系はこれに適する。十文字は先枯れ(冬期梢頭の枯れること)を特長とする品種であるがこれがため樹勢の上昇を来さず上田式仕立には最も適する品種である。早生桑である多胡早生について試験したが失敗であつた。また高刈仕立に不適当である風返種についてもうまくいかなかつた。
- (3) 上田式仕立を作るにはまず採取苗を作る場合のごとく桑樹を低植し(株の高さを地平線以下に切る)にするを可とし上段は一挙式とする方がよい。
- (4) 上田式仕立の植付株数は根刈仕立の半数ないし劣を相当とする。これを仕立てるにはまず低植にした根刈仕立を作り数年後植形が完成した後春期真直な一本の枝条を残して(支柱を建てるを可とする)他は春伐し上段を作る。翌年再び春伐をなしもし必要ならばその翌年も春伐をなして上段の樹形が完成するにおよんで植付株数を半減する。かくのごとくする時は上田式仕立となすために大なる収穫量の減少を来たさない。
- (5) 上田式仕立は毎年下段を春伐となし夏秋蚕用となすを可とする。上段より春蚕用桑刈桑を採集し夏秋蚕には下段を摘葉し晩秋蚕には上段を摘葉する。すなわち年3回採葉することができる仕立法である。
上段春伐は樹勢の上昇を来たし不良の結果を来たす。
- (6) 上田式仕立は普通同時に全部を伐採するのでないから桑樹の生理を害さず樹令は長く萎縮病の発生を見ない。しかしながら急に桑葉を多量に必要とする場合には夏秋期において上下段共摘葉することもできる。
- (7) 上田式仕立の下段(下段春期発芽前伐採の場合は夏秋蚕期には春秋兼用秋蚕用桑よりも早く発芽し發育進んでいるため葉質可良である。

- (8) 上田式仕立の欠点は樹勢の上昇である。すなわち上段よりも下段の株の発条数漸次少くなる傾向がある。ゆえにこれを防ぐには時々樹勢の引下げ法を行うことが必要である。それには上段の採葉回数を多くすることによつてこの欠点を補うことが出来る。
今まで、著者が試験して来たのは大体上田式上段、下段を隔年交互に春期発芽前伐採の場合であつたがこれは失敗であつた。毎年下段春期発芽前伐採する場合には上田式も樹勢の上昇もなくもつと理想的な成績が得られたかと考察される。
- (9) 昭和9年度の分析材料につき分析した結果、春蚕用桑においては上田式仕立の桑葉も他の仕立方の桑葉もその成分には大差がなかつた。
- (10) 上田式仕立は中刈または根刈仕立に比し取量が大である。
- (11) 上田式仕立は中刈、または根刈仕立に比し刈桑中全芽割合が大である。
- (12) 多収穫を目的とする場合には施肥量や施肥の回数を多くする必要がある。しかしこの仕立方による時は普通の仕立方よりも反当りの取量をもつと多くすることが出来る。すなわち上田式仕立は多収穫に適する。

文 献

- (1) 川瀬徳次郎 蚕糸科学講演集 第一輯 329—330(1926)
- (2) 樋口 琢磨 大日本蚕糸会報 vol. 36, No. 428, (1927)
- (3) 遠藤保太郎・樋口琢磨 日本桑樹栽培論 330—333 (1920)
- (4) 須田 圭二 年3回収穫し而も萎縮病を絶対に発生しない桑樹の上田式仕立法について 千曲時報 昭和18年7月号 (1943)

桑 苺 と 桑 林

満 知 多 生

昨年未曾有の霜害で桑の被害は見るにしのびない程だつた。今年も亦大部いためつけられて、折角春を待つて萌え出した桑自体の生きる姿もじつにいたましかつたが、その生命の所産を期待して養蚕の仕事を予定していた人々にもまことに気の毒であつた。

しかし一たんうちひしがれた桑も忽ち再生の息吹をみせて、生々しいそして頼母しい姿をとり戻した。全く生命の力の偉大さに驚くのである。

かくてすがすがしく生育した桑の緑葉に混つて紅く、やがては黒紫色に熟れる椹、すなわち桑の実を見ることが出来る。この熟れた実の形状が苺のそれに似るから桑苺とも言うかも知れない。

桑摘みをし、お蚕を飼つた経験のある人は勿論だが、そうでない人も養蚕地帯の人はこの桑苺を子供の時に食べたことに思い出すであろう。私も少年時代に丁度麦刈の頃だと思ふのだが、新しい麦稗特有の臭のするむぎがらで即製の手提籠のごときものを作つて、あのみずみずしく黒紫色に熟れた桑苺を採りに歩いたものである。その頃は「みぞ」と呼んでいた。

手や口ばたを紫色にそめて、多くの桑畑を荒し、大量に喰つたことを誇つたりしたものである。

後年桑や蚕を習いながらついでこの桑の実に就いては詳しく知らずに過ぎてしまつたが、最近桑やお蚕には全く縁のない賀川豊彦氏が或雑誌に「桑畑の立体的耕作」を提唱したのに興味を持つた。桑を単にお蚕の飼料としてでなく寧ろ桑苺生産の樹木的栽培をして家畜の飼料や人間の食料を生産すると云うのである。

桑も桑葉生産を唯一の目的として品種改良や栽培法改善に多くの研究成果があるが、椹の生産利用についてはほとんど研究らしいこともなかつたようだ。現在一般に栽培されている桑は椹の出来ない品種が多いのか、食料が豊富になつたためか、子供がその桑苺を喰つているのをほとんど見かけなくなつた。

子供の時代には「そんなものを喰つて腹をこわす」と云われたものだが、その桑苺もなかなか食料的価値がある。

味は草苺のそれまでとはいかないが、まずそれに似た味覚を感じるし、ビタミンAが豊富な上に蛋白質も多いので栄養的

果実に属することになる。更にこれを醱酵させて、清涼飲料やアルコールも作ることが出来るわけである。

家畜の飼料として、葉は綿羊、山羊に用いられることは聞いていたが、樞を豚の飼料に好適していると云うことは意外であつた。コロンビア大学教授ジョン、ラッセル、スミス著の「立体農業の研究」中に夏期養豚場及び家畜場の樹木として、桑の記述があるが、その実を目的とする品種はヒックスと称し、1エーカー当り35本植付けられるが、1樹で5月初めから7月末までの凡そ3ヶ月に亘る桑の実の結実期間、100ポンド位の豚2頭を飼うことが出来、豚は桑の実程好きなのはなく、よく肥えると云うことである。

賀川さんは戦時中桑の葉を食うことを考へて、若芽を煮て喰つたり、硬くなつた葉を焼いて醤油をかけて喰つたと云う。そう云えば、少年時代に桑の葉のてんぶらを食べたことや蚕蛹を塩と炒つて食べたことを思い出す。

更に桑の材は硯箱や茶托、その他室内装飾品等の細工物に用いられて雅趣のあるものが出来ている。

賀川さんの提唱する桑畑の立体的耕作と云うのは、桑樹を養蚕用にばかり考へず、前記のように葉と実と材を直接人間に結び付けての利用と、更に樹下の間作、中小家畜の放飼いに利用すると云う考へである。そうすれば絹の需要が激減し養蚕が著しく衰微しても桑樹そのものの効用を無価値なものにしないで済むと云うものである。

絹糸の需要後退に伴つて桑園反別も減少してきている。そ

れは養蚕のための桑樹栽培だけを考へることに原因している。ここで桑樹の生産方向を変更して、さきの立体的耕作とも云うべき桑林栽培経営に移行することを考へたらどうだろう。

現在、地域的には従来の桑園がりんご園に転換されつつある。そして裾山の山林地に少しずつではあるが桑畑が出来つつある。これはりんご園の増加に伴つて、それに撒布される薬剤の被害をさけるための消極策であつて、相変らずの養蚕用桑園型式の山の桑畑にするようであるが、この際桑林経営型式で植付仕立することを推したい。

さきのヒックスと云う桑品種は著しく果実生産向きのものらしいが、わが国に現在そのような品種があるかどうか知らないが、従来の葉質、取量本位の品種でなく、果実の多く着く品種を選んで植えたいものである。桑の実を豚が何よりも好飼とすることを始めて知つたが、豚の放し飼ひも出来るし、品種改良の結果その実が従来のものより大果で美味と云つたようなものが成るものが出来れば、苜蓿や桜桃のように食用生果としての需要にも向けられると云うものである。そうすれば桑は需葉需実兼用樹として見直さねばならなくなる。

すでに桑の植生上の研究から根刈仕立よりは高刈、立木仕立がずつと合理的であることが云われているが、これも桑林経営に有効な知識を与えている。

桑等を採る目的からでなくても産業的変遷から必然的に桑林経営がクローズアップする気がするがどうだろう。

今井武四君(蚕19)を憶う

芥藤菊雄(蚕6)

僕が今井君(蚕19)を識つたのは昭和17年の7月で当時全種連(全国蚕種業組合連合会)の主事として有楽町の蚕糸会館2階の事務室で勤務していた時である。会長に森川抱次翁、副会長に原理兵衛、福田長夫の両御大をいただいて戦時統制下の全国蚕種業関係の団体事務を扱つていた時で悪口屋に云わせると統制とは紙と人間を多く使う事だと批評した。蚕糸統制会社の発足と共に蚕糸団体の事務も御多分に漏れず複雑多岐となりその上業務指導も強化する必要から職員の増加となつた。

この時多数の被推薦候補者の中から詮衡採用になつたのが今井武四君である。

君は学校卒業と同時に農林省の蚕糸局蚕業課に就職され職務に精励されたが生来向学心強く頑強の身体に物を云わせ大学への進学目的で夜間の予備校へ入学して勉強を続けたそうだが過労の為病氣となり一時農林省の職場を退き群馬の生家にて療養した様である。幸い健康も回復したので県下の安中蚕糸学校に就職し教鞭を採られたが健康にも自信が出来て再び東京に職場を求めて全種連の技師として就任し僕等と席を同じうして在任中苦業を共にしたのである。爾來僕は同郷同窓の士として親交を重ねて来たが戦争の激化と共に経済統制は益々強化され昭和18年に、蚕種、養蚕、製糸の企業統制が実現し日本蚕糸製造株式会社が設立されたので業種別組織の蚕糸業関係全国団体は存立の意義を失つたため政府の命令により解散する事になつた。従つて解散団体の職員は一応新発足の日本蚕糸製造株式会社に吸収されたのであるが今井君は僕

と共に全種連の清算事務に残留し約1年後の19年4月にその事務を完了製造会社(日本蚕種製造株式会社略称)に勤務先をえたものである。

しかし製造会社の空気は吾々全種連の移管職員に対しては当初から他団体の者より冷飯扱ひの感じが強く割振られたポストにおいて或は給与においても満足し難いものがあつたようである。従つて小生は19年5月に満洲蓖麻蚕株式会社に出向し今井君は間もなく当時の花形会社である中島飛行機製作会社の前橋工場資材課長として転身し蚕糸業関係から脱脚して行つた。これも母体であつた全種連が他の団体に比べ政治的にも或は経済的にも弱体であつたからであろう。

僕の渡満によつて今井君との交友は一時絶えたが終戦1年後の21年に僕も辛うじて満洲から引揚げて見ると今井君は終戦直後より資材課長の経験を活かし木材会社を設立してその専務として事業界に転身して終戦後の復興に活躍しておられたのである。

君は元來上州人氣質の典型的人物で任侠の志厚く闊達明朗で同業者にも信頼厚く事業も順調に発展したが戦後の経済界は波瀾重畳では時に一進一退は免れないようであつた。従つてこの間の苦心は並大抵ではなかつたように見受けられたが時流に乗りつつ歩みを続け伸々業績を挙げその手腕には常に感服しておる次第である。2・3年前より木材部面を縮小して食糧政策の一部面たる農家の米麦保管の完全化に着目し効果100%の米麦貯蔵管の製作販売に着手し大いに事業の進展を

見つつ一面郷党青壮年の為に前橋法律専門学校並に前橋家政女学校を創設経営し漸くその緒につかんとする時病魔に襲われ弟弟医博今井精吾病院長の手厚き加療も甲斐なく発病後2ヶ月余の去る4月18日早朝49才を最後として長逝された。洵に哀愁の極みである。

氏の病氣は高血圧と心臓疾患との事であるが日頃の体軀と活動力から想像して全く夢のような気がする。

遺族は未亡人幸江さんの外中学1年の長女孝子さんと小学校4年の嗣子守君及び次男進君の4人で此等遺族の方々の中の中洵に察するに余りある次第であるが悲しみの中にも愈々強く健かに生き亡き今井君の素志に副われるよう衷心お願いする次第である。

茲に故今井君の七七忌明けを想起し乱文を記して御冥福を祈るものである。合掌。(1957.5.3.記)

蚕糸・繊維化学の最近の研究

新刊書の紹介

(繊維物理学)

高分子レオロジーの一般的な参考書として斯学を志すもの必読書とされている Alfrey と Gross の本を加え、今度 Polytechnic Institute of Brooklyn の Eirich の編集になる "Rheology—Theory and Application" vol.1(全3巻)が出版され、新たに座右の書が1冊ふえ、われわれは益々勉強し易くなってきた。

これら概説書の紹介は既に多くの専門家によつてなされているので、ここではレオロジーの1分科を扱つた二つの新刊書を紹介することにした。

◎ Mechanical Properties of Textile Fibers (R. Meredith ed. North-Holland, Amsterdam, ¥3,200)

応用レオロジーのシリーズもので、先に紹介した「Wood and Paper の場合と同様 Meredith の編集になるものである。

繊維素、蛋白及び合成繊維の3部から成り、Leeds 大学の L. Peters と H. J. Wood が Introduction 及び蛋白繊維を Meredith が繊維素及び合成繊維を担当している。各繊維の項とも構造論、荷重と緩和、応力一歪、動的性質、強度の章に分かれている。そのため全体の統一性に欠けている感があるが、豊富な実験データと新しい理論がかなり紹介されており Eyring 粘性やエントロピー弾性等が適当な所に説明されており、編者の苦心が覗える。動的性質が比較的軽く扱われているが、これはこの分野が新しいというのみでなく、筆者が英国人で、従来オーソドックスの強硬度なんかを専門とする人達だからだと思ふ。Brooklyn の Rheology Vol. II に予定されている Meredith の著述を期待するものである。

◎ Relaxation Spectrometry. (By E. G. Richardson, North-Holland, ¥2,200)

粘弾性物質の力学的挙動を記述するのに Relaxation time の spectrum が用いられている。これは粘弾性の人相書ともいわれ、いわば遺伝学における染色体地図のようなものである。従つてわれわれの研究も先年の N. B. S. を中心とした世界的な組織によるポリイソブチレンの緩和時間のスペクトラムの測定のごとく、これに主眼をおくものが多い。しかし Boltzman の定理をはじめとして数学的にも実験的にも複雑なこの種問題を初心者にも判り易く解説してあるのが本書である。

著者 Richardson は元来音響学者であるので、このような線型系の説明に詳しく、粘弾性のみならず、よくアナロジーの引き合いに出される電気系特に誘電率のスペクトラムについても詳しく解説してある。140頁の手頃な本であり、ゼミナール用テキストとしても適当と思われる。なお本の上表紙及び中表紙に写真として掲載してある(宣伝用カタログにも用いておるが)ヤング率、温度、周波数の三次元座標の立体モデルはわれわれ実験するものにとつて便利である。

(繊維物理学教室 篠原昭)

われわれはいかにして桑

樹萎縮病に対処すべきか

ロッキイ・ディスカッション(日本蚕糸学会九州支部)要旨; 1—16. 1956

1956年11月に日本蚕糸学会九州支部主催で表題のようなコ

ロッキイ・ディスカッションが行われた。桑萎縮病は明治大正時代には非常に激甚であり、蚕糸業の一大障害と見做された。しかし昭和に入り漸減し、特に戦争中は極めて少くなつた。しかるに最近また漸増の傾向にあり、特に九州地方などでは再び重大問題化しつつある。このロッキイ・ディスカッションは、その意味から、時期的にも極めて当を得たものである。司会者は九大蚕学教室の林教授で、蚕糸学会九州支部研究発表会参加者が出席し、他からの参加も多い。なお専門家として浜田桑樹部長、九大吉井教授(病理)、小島教授(生理)ほか九大関係の3氏が出席している。

桑萎縮病の発生原因については、古く鈴木樹太郎博士、三好学博士等によつてとなえられた生理説(過剰な窒素施与と過酷な伐裁)と、昭和6年に鎌方・松本両氏によつてはじめてとなえられたウィルス説が主なるものである。最近、山崎寿(蚕14)・山崎伝(蚕17)両博士によつて Mo 欠乏説が唱道され、注目を集めている。山崎寿博士がこのロッキイ・ディスカッションに参加して居られる。

全体を通じてみて、原因を究めるといふよりは、現実の対策を如何にすべきかに論議の中心がおかれているような感じである。それだけ実際問題として重大なものである。このディスカッションの要旨のしまいに、桑萎縮病の調査研究業績史として94文献の抄録がつけ加えられ、萎縮病をしる上に極めて有益な小冊子となしている。(松尾)

アルコール中の家蚕の多角体

と寄主細胞について(英文)

Morifusa Eto 九大農学部紀要, 10(4), 1957

多角体はウィルス(5%)と非病原性の蛋白で構成されている。ここではこの蛋白が細胞の普通成分であるか或は感染によつて新たに生じたものであるかを知るために、多角体と寄主細胞の酸とアルコールに対する溶解性について研究調査した。そして多角体が稀酸(HCl・HNO₃)には難溶であるが、(その酸中の行動について多角体には二・三の型があり、このことから多角体が全て同一のものでないことがわかる)三塩素酢酸で処理した多角体はその大部分(70%)がアルコールに溶解する。この溶解物質が蛋白であることは呈色反応、紫外線吸収スペクトル、超速心分離による沈澱などによつて知ることが出来る。この多角体中の蛋白はウィルス病罹病家蚕の組織細胞核中には存在しない。このことは多角体中の特殊蛋白がウィルスの感染によつて新たに形成されることを示すものと思われる。尙少量ではあるが多角体中の特殊蛋白に類似した蛋白(少なくとも溶解性と大きさの点では良く似ている)が感染初期の細胞質中に見られる、などの事実が判明した。

ウィルス感染によつて、一方には多くの多角体蛋白が新たに細胞核中に生成され、他方わずかなDNAを含むウィルス粒子が形成されて行くことと云う事実と上述の発見との間には何等かの重要な関係があるのではないかと思われる。(今村)



北佐久千曲会の 招かれざる客

香山清和

総会記事などと云うものは出席した支会の幹部が書くべきであるのを本部出席者の僕が書いたからには何か理由があると思うだろう。その通り、つまりこの総会は普通の総会と少し違っている。普通の支会総会は支部が発意で開くべきであるのにこの総会は本部から懇請して開いて貰ったのである。従つて本部が主催者の片棒をかついでいる訳で書く有資格者と云う榮譽?を得た訳である。

しからばどう云う訳で懇請して総会を開いて貰ったかと云うにそれには深い事情がある。

元来北佐久千曲会は本部に近接の位置にあり本部をバック・アップする上に最も重要な位置にあり、昔は大いに役立つものであるが最近では会費の納入も極めて悪く文書に対する音沙汰もほとんどなく、総会も開催されていないと云う不振状態にある。それでこれを何とか手を打たなければならぬと云う話が本部に持上り相談の結果、第一の手段として山崎支会長に総会を開催して貰うよう書面を出した。とても返事は来まいと思つたのが予想に反して5月3日午後2時から小諸懐古園山城館で総会を開くから出席して欲しいとの返事が来た旨、野口理事長から通知があり僕にも出来たら同行して貰いたいと云つて来た。何時も食うに追われて暇のない僕にも珍らしく時間が空いていたのでこれも何かの巡り合せと考え招かれざる客となつて同行した訳である。そんな訳で来賓ではなく半分主催者である上に招かれざる客の僕もおり、貧弱な支会に負担をかけては悪いと考え会費持参と云う事にした。

懐古園に着いたら「花祭り」と云う看板が出ていて非常な人出で呑めや唄えの騒ぎである。

花もない処で花祭りをやりそれにこの人出とは、小諸の人もなかなか風流であると感心して尋ねて見たら花は花でも桜の花でなくおジャカ様の花祭りであつた

そうでいくらか合点がいつた訳である。そうした景気の公園の中にある山城館と云う料亭?に這入る。昔は由緒ありげな家であるが障子は敷居に合わず、鴨居は曲り、床間の掛軸は床に余つていると云うすごい有様である。そう云う風流な会場で未だ人数が揃わないからと予定時間より1時間許り待つていたら出席者は16人位となりこれ以上は増えまいと云うことで、3時頃から総会は開始された。当局者は出席が悪くて……と弁解していたが僕等には思つたより多く集つたと考えられた。まず第1に山崎支会長から「母校昇格の時には何度も東京へ行つた。熱意がない訳ではないが笛吹けども踊らずと云う訳でこんな始末になつた。商売違いにもなつたのでこの際支会長を辞した



日光

い」との発言があつたが同氏の熱意のある様子が強く感じられるので辞意は一同の認める処にならず適当なスタッフをつける事を条件として留任と決定した。

引続き野口理事長から躍進の一途をたどる本部の現況の報告があり、更に、僕も飛入りで駄弁を弄しその後支会の振興策につき協議した。その結果、本日集まつた人達は会に熱意ある人だからこの人達を中心となり地区別の責任者(幹事)を作り支会の組織化及び会費の徴集に当ることとなつた。しかし本日の出席者だけでは間に合わない地区には本日の出席者以外の人達をも選定した。それでこれらの人達に25日にもう1度集合して貰いその

時には本部からも誰か出席して具体的方法を協議することとした。なお白鳥竹和氏を幹事長に選任し山崎支会長を助けることになつた。かくて北佐久千曲会の組織化の基礎はスラスラと樹立され会議は目度く終了した。

その後、別室に設けられた席で懇親会を行い肴は少くとも酒多からずとも飲を尽し野口理事長発声にて北佐久千曲会万才を三唱し5時頃散会となつた訳である。

各地区を担当する幹事の内には本日出席せられない人を本人の承諾を得ないで決めた向があるが千曲会のためを思い大局の見地から曲げて御承知賜り御骨折り下さらんことを御願ひする。唯形式的に幹事になるならなんでもないのであるが、本当に責任を負つてその仕事をやらうとすれば実に容易ならぬことである。人から彼は物好きだ、馬鹿だと云われるような人がない限り、会はうまく行くのではない。支会長、幹事長、幹事諸氏よ、大いに物好きなり馬鹿になつて骨を折つて頂きたい。こんな事を書いている僕もつくづく馬鹿で物好だと思ふ。

山崎支会長は風評では熱意がないように聞いていたが会つて話して見ると大きな違いで非常な関心を持つておられる事がわかり僕等が誤解していたことを深くわびる次第である。

やはり会つて見ることはよいことである。総ては氷解するものである。

25日頃幹事が開かれる予定と聞いたがその当日、白鳥幹事長が本部事務局へ来訪され明日幹事を開くのでその資料にと会費未納額を調査して帰られたとのことなので26日に幹事は開催されたことと思ふ。その会議内容をお聞きした上第二の手を打ちたいと思つている。

最後に北佐久千曲会の皆様へ御願ひする。地区担当の新しい幹事がどんなに努力されたとしても皆様の協力がなければどうにもならない。母校にも千曲会にも難問題が山積している今日、北佐久千曲会の果す役割は実に重大であることを認識され奮起願ひ大いに笛に踊つて頂くことを願つて已まない次第である。本部事務局には数日前新たに若林茂一氏と云う大物が着任されたのでこれから大いに業績が上がるものと期待している。僕の荷も相当軽くなることであろう。

尚当日の出席者氏名及び役員名は10頁の千曲会告知板に記した。

製糸学科の今後の 在り方について

馬場長市(糸16)

1. まえがき

一昨年の千曲会総会において三丹支会より母校発展策として製糸学科の名称を蚕糸業現状に鑑み、改名されては如何と提案した処、出席者の各位の共鳴を得ながら、学校当局の内部事情により仲々困難な問題であるが、改めて研究するとこの問題はどのようになっていることであろうか。

既にあれから2回にわたる卒業生を世に出しながら未だに何等の結論が出ぬのは遺憾である。否既に具体案が出来ておりながら未発表なのかも知れない。それならばまことに結構であるが、まだ具体案も出来ておらぬということであれば、急速にこの問題を解決せぬと今後の母校発展と卒業生将来の進展上、由々しい問題であり、何とかせねばならぬと思うのは筆者のみではあるまい。

元来学科の内容、及び科名は世の移り変わりと共に変化してしかるべきであろうと思う。

御承知の通り戦後の蚕糸業、特に製糸業は、まことにみじめな過程を経て、斜陽産業に転落しつつあることは今更説明を要しない。最近の製糸科卒業生の就職先はほとんど製糸会社でないことを見れば解るであろう。又卒業時、製糸会社に就職した多くの同窓生が現在、はたして何人製糸関係の仕事に従事しているであろうか。大部分は他の事業に転換している。幸い、製糸科卒業生は極めて優秀であり、たとえ、専門外の事業に転向しても何んとかやり遂げ、それぞれの地位を確保しつつ活躍しつつあることは頼母しい限りである。

即ち学生時代に基礎学科をみっちり勉強し、石にかじりついて、新運命を打開せんとすの不倒の母校精神が、かくあらしめているものと思う。たとえ専門が変わっても何んとかやり遂げるものであり、心配はいらぬものである。

所で只今の製糸科名は現状のままでは世の移り変りにマツチせぬ結果となりはせぬだろうか。ここに時代の要求に応じた学科名となし、又学科の内容において或る程度の変更をすることが時代の要求にそう所以ではないであろうか。

2. 母校学科名の変遷について

母校の創立当初は養蚕科と製糸科との2科であつたがその後時代の要望に応じて製糸科内に紡織科を設け製糸紡織科となりその後紡織科が製糸科より独立して絹糸紡績科となり、更に時代の変遷に伴い紡織科と変つたわけである。即ち世の移り変りによりいわゆる時代と共に歩いて来たのである。

3. 製糸学科の改名について

しからば母校製糸科の内容及び名称は如何にあるべきか。

次に私案を述べて御参考に供したいと思う。

その一つとして考えらるる方法は製糸学科と紡織学科とを合併して繊維工学科と改め、その専攻を製糸学専攻と紡織学専攻とに内容を分ける方法であるがこの案は内容的には現状と変りないが科が1つ減少するため縮少した感じを与え又製糸科と紡織科との競合、派ばつ争い等が

生じやすく、其の運営が極めて困難となるので賛成出来ない。

そこで最もよい方法は紡織科はそのままとしておき、製糸科を繊維工学科又は繊維機械科と改め、学科内容においては従来の製糸学科の専門学科を或る程度圧縮し、繊維機械科的色彩を濃厚にし、又新に原子物理学を取り入れて行つてはどうか。即ち従来の製糸科の内容に、専ら繊維機械の基礎理論及び専門的学究と新時代の要求たる原子力科学に關係する基礎学科を教授内容とすべきであると考える。

かくして従来存在の各科名はそのまま残し、製糸科のみ時代の要求に応じて、発展的改名をなすべきであると考える。しかしその内容において更に基礎学科に重点を置くと共に、繊維機械方面の学科を拡充することが最も望ましい措置であると考える。

会員の近況

神奈川千曲会支部

桜花も散り初めた、4月12日横浜伊勢佐木町養成軒にて31年度総会を会員約30人集合、母校よりは荻原先生をお迎えして会を開いた。まず支部長の一般報告、会計報告、32年度支会長並びに幹事の推薦、荻原先生の記念事業の計画案、本部会費の値上げ問題、広告料金の件についてお話を承り宴会になった。

酒がまわるにつれて各々余興に移り、不斷の地合を出すものあり、それぞれ愉快な時間を過した。

誰となく「御国の為にますらをの」校歌を歌いつつ、ありし母校をしのび盛會裡に会を閉じた。

昭和32年度役員氏名

支会長	梅沢 万次郎(三菱商事)
○会計幹事	萩野 喜次(生糸検査所)
幹事	高村 弘(昭栄生糸)
幹事	石塚 敏夫(生糸連合会)
幹事	佐久間政志(生糸検査所)
幹事	田中 早苗(生糸検査所)
幹事	月丘 恒男(原合名会社)
幹事	清水彰(繊維工業試験所)
幹事	斎藤典之(繊維製品検査所)

註○印は本部連絡員

千曲会諏訪支会総

会だより (32.5.1)

昭和32年度千曲会諏訪支会総会は新緑の5月1日、母校より伊藤学部長先生、

蒲生先生、林先生の御列席を得て上諏訪温泉吉田屋別館にて開催された。尙当日蚕糸試験場岡谷製糸試験所創立10周年記念式典に御出席下された長野県蚕糸課長宮城博氏(蚕13回)及び片倉工業本社馬場武氏(糸18)の二氏を加え総員31名にて会員数全国一を誇る当支会だけにその盛大、且つ重厚さは質共に言語に絶するものがあつた。総会は小口支会長の挨拶に続き各種議事を決議し最



後に役員改選にて長期支会の発展に尽された小口支会長の改選を行い次期支会長は詮衡委員に島倉、手塚、望月、前支会長の四巨頭に一任した結果支会長は前副支会長の小松忠幸氏(糸25回)と発表万場一致でこれを承認し、ここに新支会長の決定を見、その他の役員は支会長一任し、支会のいよいよ発展するようお互に協力することを約し総会を閉じ次いで宴会に席を移した。そして新支会長小松氏の「顧問及び会員の物心両面における協力を願う」と奇抜な提案が通り挨拶の後、伊藤学部長の支部発展を期待

するの祝辞及び林先生の学術会議員当選の挨拶があり、その後新入会員、青木、金井、窪田、小林の紹介に次いで一同乾杯。芸者諸嬢を含めての和やかな会は時間を忘れて飲むほどに酔うほどに大先輩

した御忠言。有難く聴き及んだ次第である。

堀口氏『どうも倉沢さんは口が悪いでノオー』だが、齢40を越して、オヤジからのオ説教を聞くのは、胸にジーンとこたえるワイ。素直に聞かにやなるまい。』



諸氏のオハコ、珍芸が続き、ついに伝統あるパッパが一同の拍手で扇子に代りゲンコツ、さてはオボンで手さばきよろしく、なかなか意気盛んなところを示し、懇親会の目的は達せられ、めでたく千曲会の万才にて散会した。

『蚕25回』クラス会

竹田博士の祝賀に併せて

—蒲生・倉沢両教授出席—

『蚕25回』クラス会が5月4・5日上山田温泉清風園において開催された。

集まったもの、東より会田誠司、矢野進、西方より堀口友治の諸兄、母校より蒲生俊興、倉沢美徳両先生と、本日のところは主賓である竹田寛博士御夫妻、それに地元坂城町長塚田典次、長野の岡田量雄というところ。しめて9名というところであつたが、なかなかの盛會裡に、終始され、各氏の隠し芸は、夜半、時の過ぐるを忘れた。

酒量は、しめて5升8合一。

まさに酒豪ぞろいである。

塚田町長と、倉沢先生はまるつきりいけなのだから、とにかく一升口は4名か、5名はいたはずだ。とにかく過半数は1升~2升 Class という勘定だつた。

倉沢先生の曰く『……酒もホドホドになあ……』御自身はサイダーをなめながら、いらく心配顔である。父親然と

上田の学齢50年に対し、25回というと正に及に位する、上にも下にも真ん中の階層という訳だが、今回の竹田寛兄の学位獲得は、なんとも御目出度き限りである。

蒲生先生の御挨拶の中で『竹田君のエネルギー的な御精進が、この成果をおさめたので、本人の努力もさることながら、奥さんの内助の功績は、あずかつて実に大きかつた。』と結んだ。

一場の空気が、しんみりと静まつた情景で印象的だつた。

倉沢先生も、続いて『……奥さんもよく頑張つて下さつた。深甚の敬意を申し述べたいと存じます』と言葉を切つた。

ゴールデンウィークでない方が出席率はよいかも知れぬという意見が大方であつてみれば次回からは、これは避けたいと思ひます。

来春3月 僕等の“蚕の光窓の雪”か(?)なんて、おつしやつた蒲生、倉沢両先生。『ごじょう談じやありませんよ』と言つてはみたものの、そうなれば、母校養蚕科も大部変つて来ることになる。



竹田兄の今後の活躍と、自愛を祈るや切である。当日の寄書披露とゆこう一。

終りに、当日公務その他で、都合出来ず欠席を通知して来られた諸兄は、清水良一(東京)、塚田信二(豊科)、宇田

哲郎(飯山)、内藤康三(豊橋)、山崎義徳(長崎)、生天目久平(茨城)、松吉博隆(名古屋)、長谷川敏文(富山)の8名であつたので附記します。

—(K.O)—



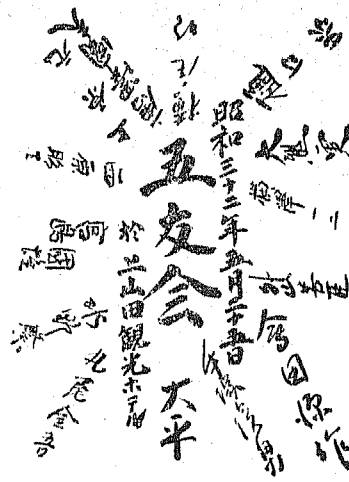
纖維化学 五友会

5月25日の午前10時半頃2時間の連続講義を終つて研究室に戻つて来ると纖維化学第5回卒業の大熊君(明成商会)が堂々たる姿をして突然入つて来た。つづいて横沢君、横尾君、水野君、外山君等のいずれも堂々たる元気な姿を現わした。余りに立派な紳士5名の訪問を受けて驚き且つ何とも云われぬ嬉しさである。在学当時と比べて何という立派な姿かと慶賀にたえない。さて今日は卒業してから10年になるのでその祝賀会上山田観光ホテルでやるから出席せよとのことに大平先生と共に午後5時頃上山田観光ホテルに出かけた。集る五友会員10数名一同大展望風呂に汗を流す。6時半頃から戸倉上山田を一望出来る大広間に山海の珍味を前にして水入らずの宴會に入つた。

農林省食糧輸入関係の仕事に威力を示す横沢君、染料薬劑界に実力を示し、最近下腹に重みを加えた大熊君、東都の中央に纖維関係の会社を經營する堂々たる横尾君、ケミダイスに独逸人と肩を並べる唐沢君、工業技術院技官として全国に活躍される水野君、蚕糸の研究に万丈の気をはく外山君、上田の専売公社に活躍の樋口君、長野県庁に保健衛生風紀取締の役をする上原、西原両君、上田松尾町に纖維関係の商店を經營する宮島君、上田第一中学の先生で教育者の実に22貫の堂々たる丸尾君、大町で銀行マンとして活躍の手塚君、いずれも自他共に許す第一人者たるべき人物の集りで呑むほどに食うほどに学校の先生というのでは拝見する

ことの出来ない珍しい余興を見せて貰い各自の結婚に入るまでのプロセスやその後の生活ぶりの紹介に花が咲いた。宮島君は可愛いお嬢さんをつれて来られ人気を博した。最後12時近くなり上原君と水野君のおきよう入りの数え歌には思わず笑いが止まず、おかげで朝まで一眠り、明けて朝食前の日本酒の味は又格別、これで皆元気一杯、次の15年の記念を楽しみに解散した。出席者は別記寄せ書きの通り、こんな愉快な会合は最近になく盛会そのものであった。これからの、これらの卒業生諸君のますます御発展を祈る次第である。

(繊維化学会日記)



勝てる試合ではあつたが、次の2回戦、更に3回戦と出場するようになれば、体が参つてしまうからなァ……とのことでした。

千曲会告知板

本会日誌

- 5月24日(金) 上小支会総会を上田市信州ハムで開催野口理事長外多数出席
- 若林茂一氏本会事務主任に就任
久保藤一氏の後任については暫時若林興考、別府茂河氏の応援で糊塗してきたが、このたび須坂農業高等学校長を功退された養蚕科12回卒の若林茂一氏が6月1日から本会事務主任に正式に就任した。

5月31日、東京事務所開設の打合せのため町田理事上京、東京支会役員と細部の打合せをしてその管理運営について一任した。場所は浅草田原町3の7、唐木田ビルの一室である。その利用等に関する詳細は次号に載せる。

- 5月3日北佐久千曲会総会開催、当日の出席者は次の通りである。

出席者氏名及び役員名

- 小林 喜胤(糸別1) 小諸幹事
- 大山 融(蚕22)
- 白鳥 竹和(紡17) 幹事長
- 遠山 正人(蚕20) 川西幹事
- 萩野 俊一(糸8)
- 安川 寛(蚕12)
- 山崎 保太(糸10) 支会長
- 半田 義雄(蚕22) 浅間幹事
- 中村 広(糸27) 川西幹事
- 五味 克人(学糸3) 小諸幹事
- 浦山 藤吉(蚕5)
- 渡辺千代子(教7)
- 小林 節子(教4)
- 小林 景子(教4)

本部出席者

- 野口新太郎(紡2) 理事長
- 香山 清和(紡3) 理事

未出席で決めた役員

- 山岸 政治(蚕22) 浅間幹事
- 鈴木 公人(蚕34) 浅間幹事
- 小林 正人(紡23) 浅間幹事

母校啓事

体 育 祭

母校では5月初旬のゴールデンウィークを利用し、初めての試みとして5月3日から同5日までの3日間にわたって第一回体育祭を挙行政した。競技種目別優勝チームは次のとおりである。

- △庭 球一職員チーム
- △ソフト一製糸学科4学年
- △卓 球一製糸学科2学年
- △駅 伝一養蚕学科3学年

学生後援会総会開催

母校学生後援会総会が5月31日(金)母校会議室で開催され、31年度決算、32年度予算、役員改選等について審議された。

新役員の名簿は次のとおりである。

- 会 長 井上 柳梧
- 副会長 桜井 吉利
- 理 事 遠藤 要蔵、浦生 俊興、小林 只雄、古谷 栄蔵、細田延一郎、峰村 嘉行
- 監 事 兎東 武雄、片岡 俊雄、北条 舒正

関東甲信越大学の学生体育大会開催予定

関東甲信越(東京都を除く)国公立11大学2500名の学生参加のもとに信州大学主催で8月30日(金)から3日間、陸上、野球、庭球、卓球、水泳、排球、籠球、

柔道、剣道等15種目にわたって競技が行われることになった(中島記)

母校教職員組合情報

31年度組合総会は去る4月27日に行われ、執行部の改選の結果、次の諸氏が選出された。

- 執行委員長 荻原 清治
- 副執行委員長 隅田隆太郎
- 総務部長 高木 春郎
- 同 委員 池田 忠夫
- 同 委員 中原 武
- 文化部長 松尾 卓見
- 同 委員 浦原みよ子
- 厚生部長 内田 貞夫
- 同 委員 鈴木 恵
- 同 委員 西村 善次
- 会計部長 清道 伝

なお当日の重要議案であつた日教組加盟の件及びその他の案件も熱心な討論の後、満場一致で可決され、今後の組合の一層の活動が期待されている。

野 球

5月26日には第10回長野県労働組合体育大会上田地区大会が開催され、職員組合の野球チームがこれに出場し、松山スキーと対戦した。しかし善戦むなしく2A-Oで惜敗してしまつた。翌日チームの或る人に試合経過を聞いたところ、なにしろ養蚕実習が始まつて忙しいので、

会 員 動 静

頁数	氏 名	卒業回数	新 住 所
37	中村 幸重	糸別 3	須藤製糸K. K. (古河市)
47	中島 一夫	糸 31	この項は除去
50	横沢 正雄	蚕 23	亀山製糸・前橋乾繭所長 (前橋市宗甫40)
53	久保 博俊	糸 35	片倉工業・大宮製糸所 (大宮市 吉敷町4の241)
61	有賀隆一郎	紡 27	郡是産業K. K.
62	伊藤 敏之	糸 15	富士精密工業販売部 (杉並区宿 町88)
66	小林 宏信	化 6	農林省農業技術研究所化学部 (北区西ヶ原町2の1)
72	土屋 松寿	農 2	近代商事K. K. (中央区日本橋 本町1の3江戸橋ビル)
75	花村 吉磨	学化 4	東海製油工業K. K. 東京営業所 (台東区仲御徒町2の32)
78	宮下 久吉	蚕 32	農林省蚕糸局蚕業課桑園係所 (千代田区霞ヶ関2の1)
83	川久保卯人	蚕 36	片倉工業非崎製糸所 (非崎市非 崎町1266)
88	田中 幸男	学糸 3	東柴鶴見工場 (横浜市鶴見区)
93	小出権五郎	蚕 22	新発田蚕業指導所長 (新発田市 本丸)
94	相場 ナツ	養 6	(住)新潟県新発田市材木町相馬 清二方
94	二宮 正三	蚕 28	(住)新潟県五泉市川瀬32
99	中村 新治	学糸 2	石川県生糸検査所 (金沢市高岡 町)
104	佐藤 憲更	学蚕 3	農林省長野統計調査事務所北佐 久出張所 (浅間町)
106	山口 好吉	糸 30	(住)北佐久郡浅間町岩村田862
110	石森 秀	化 7	昭榮製糸K. K. 上田工場 (上田 市常入)
115	田中 容子	糸別 5	昭榮製級糸K. K. 上田工場 (上 田市常入)
116	武井 伍一	学糸 3	武井製糸所 (福神町)
125	芦田 和	蚕 36	依田川中学校 (丸子町依田)
134	林 久男	農 3	西塩田中学校 (塩田町)
136	村本 一郎	化 7	豊職中学校 (住) 坂城町

139	秋山 俊之	農 4	篠ノ井保健所 (篠ノ井町)
140	瀬在 茂	化 4	通明中学校 (住) 埴科郡坂城町南条金井
143	上原 邦夫	紡 27	坂城中学校 (住) 篠ノ井町
144	桜井 吉利	蚕 6	(住) 埴科郡屋代町
148	高橋 秀雄	学蚕 1	須坂農業高校 (須坂市)
149	宮崎 剛	学紡 3	須坂農業高校 (須坂市)
153	久保田貞親	学糸 4	北信理化学有限会社 (中央通新 田町)
159	上野 成雄	蚕別 3	普及社蚕種製造K. K. (松本 市)
159	岡 亨四郎	紡 2	長野県繊維工業試験場 (栄町 862)
159	萩原 理宏	化 6	長野県繊維工業試験場 (栄町 862)
160	栗山秀一郎	学蚕 2	普及社蚕種製造K. K. (松本 市)
161	竹内 次志	学紡 3	長野県繊維工業試験場 (栄町 862)
163	若林 徹	紡 21	長野県繊維工業試験場 (栄町 862)
169	金野 謙保	糸 12	岡谷壺上高校長 (岡谷市)
184	山田 良人	糸 18	静岡労働基準監督署長 (静岡市 追分町70) (住) 静岡市安東町2の20)
187	上林多兵衛	蚕 7	自営 (住) 宝飯郡音羽町大字 萩字倉戸50)
188	菊川 武	学化 3	東洋レーヨン・愛知工場 (名古屋 市西区堀越町字栗越238)
204	東 正雄	紡 20	若林製糸紡績K. K. 春木工場 (岸和市春木町1173)
209	中山 徳重	紡 30	若林製糸紡績K. K. 春木工場 (大阪府岸和田市春木町1173)
215	北原 基	紡 8	神戸市繊維製品検査所 (神戸市 鈴合区二宮町1, 22)
220	千葉 達人	糸 18	郡是・塚口工場長 (兵庫県尼崎 市塚口) (住) 同上社宅
228	東城 篤義	学化 5	三菱レイヨン・大竹工場製造第 一部紡糸課
232	柄沢 昌一	紡 28	敷島紡績K. K.・高知工場 (高 知市南奏泉寺158)
	死亡 一志	蔵人 糸 1	
	死亡 前田 昌孝	紡 28	

特別活動資金の募集について

特別活動資金については当初の予定額に較べ未だ2.5割程度の応募金額であります。この資金の目的である就職斡旋については着々効を奏し、既に数名の方が就職できて非常に感謝されております。生存競争の激しい今日、この資金は多々益々弁ずであり、共済的のものであることを再認識いたされ、未醸出の方には1日も早く御納入の程をお願い申し上げます。

千 曲 会

会費領収

(6月10日現在)

昭和32年度会費300円也

- 中村 登一郎 (紡19)
- 桜井 隆夫 (紡4)
- 永井 俊郎 (糸16)
- 熊田 喜代志 (化2)
- 安部 重 (糸24)
- 中山 徳重 (紡30)
- 井上 丈 (紡21)
- 一之瀬 徳治 (紡)
- 茨木 宣雄 (蚕38)
- 福島 規 (農4)
- 近藤 員矣 (蚕26)
- 齊藤 芳夫 (農5)
- 福島 義衛 (蚕37)
- 久保田 昇 (紡32)
- 渡沢 栄一 (農4)
- 工藤 実司 (蚕19)
- 村山 義明 (紡大3)
- 柳沢 孝雄 (蚕大2)
- 若林 為夫 (蚕18)
- 田中 福三 (糸35)
- 坂下 和三 (化9)
- 工藤 甲子太 (糸32)
- 母袋 忠右衛門 (蚕23)

- 佐藤 東平 (糸17)
 - 佐藤 一助 (蚕20)
 - 関口 和夫 (化5)
 - 手塚 逸郎 (蚕28)
 - 佐藤 勇二 (蚕33)
 - 金子 昌夫 (紡大3)
 - 萩原 秀治 (化2)
 - 宮入 広司 (糸34)
 - 宮島 国雄 (化5)
 - 高橋 俊雄 (糸38)
 - 和田 晋 (糸12)
 - 香山 清和 (紡3)
 - 加々井 精喜 (蚕13)
 - 河田 栄一 (紡18)
 - 北条五郎右衛門 (紡17)
 - 窪田 作水 (化2)
 - 中村 精一 (農1)
 - 宮堀 俊雄 (蚕17)
 - 樋口 昭 (化5)
 - 麩 淳 (農5)
 - 堀江 史郎 (蚕35)
 - 井沢 喜三 (紡16)
 - 酒井 栄一 (蚕大1)
- 昭和32. 33年度会費
 堀田 昭一郎 (蚕35)
 未納会費納入者
 1,500円

- 三井 滋 (糸33)
- 那須野 博人 (紡30)
- 堀田 昭一郎 (蚕35)
- 金1,200円
- 高木 三治 (糸3)
- 桜井 隆夫 (紡4)
- 金1,000円
- 白鳥 竹和 (紡17)
- 中山 徳重 (紡30)
- 金900円
- 半田 義雄 (蚕22)
- 樋口 昭 (化5)
- 金800円
- 小田中 寿雄 (化9)
- 安部 重 (糸24)
- 金600円
- 春原 寛 (蚕大2)
- 金400円
- 広瀬 洋 (蚕32)
- 金300円
- 永井 俊郎 (糸16)
- 金200円
- 金野 巖保 (糸12)
- 西原 淳一 (蚕17)
- 宮城 博 (紡13)
- 若林 衛 (紡21)
- 岡村 源一 (糸6)

- 小林 宇佐雄 (糸38)
- 由井 千幸 (紡16)
- 熊田 喜代志 (化2)
- 上石 隆二郎 (糸29)
- 清水 智英 (紡34)
- 清水 茂一 (農1)
- 谷口 顕一 (化6)
- 中村 文雄 (蚕35)
- 深井 真澄 (農2)
- 細川 俊雄 (蚕18)
- 大谷 勇 (糸9)
- 井上 大 (紡21)
- 井沢 喜三 (蚕16)
- 中村 登一郎 (紡19)
- 金100円
- 水出 真一 (農1)
- 春日 正一 (糸32)

特別活動資金

受領報告(6月10日現在)

- 金1000円
- 中村 登一郎 (紡19)
- 永井 俊郎 (糸16)
- 金500円
- 桜井 隆夫 (紡4)
- 金300円
- 小松 秀治 (化8)

編集後記

○各地から寄せられた、盛大な支部総会の模様や、更に会員の皆様の活発に活動されている、たよりに接すると、野口理事長が、新年号(No. 62号)で述べられている“千曲会再建の年”が着々と歩を進めているということを強く感じられました。

○先輩各位の行間にあふれる母校愛には深く頭が下がります。われわれ若い者(編集子だけかもしれません。とすればわれわれなどと複数にしたことに前もって深くお詫び申し上げておく次第です)の母校観、千曲会観などはともすればケ・セラ・セラ的になりますが、この“千曲会再建の年”にあたって、あらためて深く考えてみる必要を痛感しました。

○いよいよ東京事務所の設定が本極りになりました。これについては次号に詳細が載ることになっております。又千曲会の事務主任には若林茂一氏(蚕12回)が就任されましたがこの東京の事務所の設定といい、若林氏の就任といい、本会の発展のためには、まことに喜ばしいことと思えます。

○今年は5月4日の晩霜のために、母校の蚕の掃立は予定より4、5日遅れました。その後の桑の回復もはかばかしくなく養蚕実習に大いに影響しました。今、この原稿を書いているとき、母校の養蚕実習がもつとも多忙な時期であります。雨にうたれながら、又新緑のまぶしい陽光をあびながら学生たちの若々しい実習姿が校内に見えています。

○いよいよ本格的な梅雨の季節になりました。昔からこの梅雨は、わが国の農業にとつては欠くことの出来ない重要な意義をもっているものなようですが、それにしても憂うつな季節であることはたしかのようです。

更に最近ではクリスマス島附近における一連の水爆実験による放射能が、この梅雨と一緒にたつて、わが国にやってくることを考えると、その憂うつさは、昔とちがつて鋭くわれわれの神経を刺戟するよう思われます。

しかし今年の梅雨の型は断性型なようですが、憂うつな雨降りの続いた後に、たまたますつきりとした青空が眺められるのは、なにかほつとした感じを得させてくれます。

○梅雨による憂うつさが、いざさかでも晴ればと、初夏の高原の写真と、日光の荘厳な華厳の滝の写真を作者にお願いして載せましたが、編集子の一人合点に終らなければ幸甚と思つています。

○編集未熟のため不体裁のところもあると思いますが、御寛容のほどをお願いすると共に、御投稿下された先輩各位に厚くお礼申し上げます。

会員各位の御健闘を祈ります。(Y)
 編集理事 田口 亮平 編集総務 小山 長雄
 部 員 石川 博 中原 武 西山 久雄
 美斉津利正 清水 周 柳沢 幸男